「超群島——ライト・オブ・サイレンス」展

3.11が私たちに突きつけた問い

2011年3月11日以後、エネルギー問題やインフラストラクチャーの脆弱性、中央と地方の産業構造の格差や金融資本主義がもたらす非対称性、さらに危機管理体制と安全保障問題、政治の無力性などが次々に明るみになっております。つまり戦後の総括を先送りにしたツケが被災における被害を深刻化しているのです。「3.11」は、モダニズムに根差した戦後のパラダイムに切断線を引き、いくつもの自己矛盾を孕んだ問いを私たちに突きつけております。

国家的枠組みから離脱して、土地に根差した固有の文化が現代的文脈に蝟集(群島化)し、そしてそれらがしばらくすると離散して再び異なった群島として組み替り、果てしなく反復する様態を「超群島」と呼ぶことにします。高度経済成長という社会背景のもとに交通インフラの整備などを通して実現されてきた、これまでの日本列島の将来像を現代の情報インフラの整備を介していかに書き換えていくのか、またコントロールを失い機能不全と化したこの国のシステムの問題解決を図るための新たな意思決定のイメージとは何なのかといった問いに対して、本展覧会では、新たなコミュニケーション間のプロトコルを起動させ、パブリックな意思決定のイメージに介入する「アーティスト/アーキテクト」たちのメッセージを発信するものです。

さらに青森が持つ深い森のイメージと土着性、そして縄文という古代の時間層に「ライト・オブ・サイレンス(静かなる光)」を照射し、「生と死の循環」と「リスク社会とアニミズム」の問題を提議いたします。本展に出品しているイギリス人アーティストのダレン・アーモンドが「3.11」以前の岩手県宮古市の三陸海岸浄土ヶ浜を満月の下(ライト・オブ・サイレンス)で長時間露光によって撮影した作品「Fullmoon @ Miyako」(2006年)は、「死と再生」を繰り返す永遠の循環を浮かび上がらせました。

最後に本展覧会の企画者として、出品者でもある磯崎新氏の「群島」というコンセプトから多くのインスピレーションをいただいたこと、また、参加されたアーティストや建築家、そして彼らを支え協力された多くの方々に深く感謝の意を表させていただきます。最後に動線設計よって本展覧会のテーマとなった「超群島」の島々(各展覧会場)の架け橋を施された建築家青木淳氏に敬意を表します。

青森県立美術館美術統括監/飯田高誉

青森から見た現代日本の姿

2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の後で、私たちは強固なはずの都市インフラが実はとても脆弱であること、順調なはずの国家の財政が危機であること、公平なはずの中央と地方の関係が実は不均衡であることなどを知りました。それは一夜にして状況が一変したということよりも、1960年代から徐々に構築してきた私たちの社会システム全体が耐用年数を迎えつつあることが顕わになったということだと思います。

今から26年前の1986年、ドイツでエネルギー問題や原子力発電の是非がさかんに議論されていた頃、社会学者ウルリッヒ・ベックは、科学技術が生み出した危険を科学技術によってコントロールする私たちの社会のありようを「危険社会」と名づけ、警告しました。現在の日本社会はベックがいう「危険社会」そのものであり、大規模発電、工業地帯、超高層建築など、科学技術が生み出した新しい都市の基盤群はコントロール不可能な「新しい自然」として人々の不安の対象となっています。ここに現代的な霊(アニマ)の現れをみることもできるでしょう。

こうした視点で工藤哲巳や小島一郎など、1960年代に活躍したアーティストたちの作品をみると、不思議なほど現代的に映ります。放射能や通信技術など、当時の新しい科学技術に彼らが感じた不安は、2010年代の今、現実のものとなったからです。すなわち、50年前のアーティストたちが今日の私たちに教えてくれることは、現在の日本社会が直面している困難な状況は戦後史全体を掛けて生じてきた問題であり、これらを理解するためには、これまでの50年で私たちの社会がなしてきた歴史全体を見直す必要があるということです。

そこで本展覧会はまず、日本列島全体が高速道路や高速鉄道のネットワークによって結ばれ、ひとつの「群島Archipelago」となった1960年代以後の日本の社会状況に加え、情報のネットワークによって世界中がひとつに結ばれた1990年代以後の新たな群島的状況を「超群島 Hyper Archipelago」と名付け、そのありようを描くアーティスト/アーキテクトに焦点を当てました。

また今回は特に、青森が持つ深い森と大地のイメージにインスピレーションを得て、複雑な社会システムの上に生と死が隣り合う現代社会の「静謐な光(=ライト・オブ・サイレンス)」をもうひとつのテーマとしました。それは今回の展覧会にあたり、世代の異なる作家たちの作品群を今日の社会状況に照らしながら並べ、独特の抑揚のあるこの美術館の展示室にレイアウトして眺める作業のなかから見えてきたストーリーでもあります。展示のなかに現代社会に対する青森ならではの批評的なまなざしを感じて頂ければ幸いです。

建築家・東洋大学講師/藤村龍至

1——静謐な光

満月の夜に月明かりのみで撮影されたダレン・アーモンドの〈Fullmoon〉シリーズは、人間の気配が消えた夜の風景が、淡い月明かりと長時間露光によって昼の世界のごとく映し出されている。これらは2006年に来日した際に宮古、美浜、高浜などで撮影されたもので、3.11以後、まったく別の意味を持つようになった。津波に飲まれた宮古、原子力発電所群のそばの美浜、高浜、小橋、難波江などの海岸の写真に映された、静謐な光に満ちた風景は、まるで震災以後の世界を予言し、人間の存在の無力さを批評しているかのようだ。

2——近代化と地方

津軽の厳しい自然とそこで強く生きる人々を撮影し続けた小島一郎の作品は、雲間から射す神々しい光に照らされた水田、雪原をひとり歩く農夫、馬車の轍など、敗戦してもなお、青森の白い大地と荒ぶ海を強く生きる人々の生活を美しく描いている。雪に埋もれる農具や水子のための化粧地蔵など、一見、牧歌的な風景を切り取った美しい写真にも、日本が富国強兵政策のもとで地方都市に国家の食料庫としての役割を担わせるべく、本来、熱帯・亜熱帯気候原産の稲を寒冷な東北地方に導入しようとしたように、中央本位の国策の影で歪められた地方の姿がある。

キュルルfeat.チハルチロルの《ひかりのありか》は、都市の煌々とした夜景を映し出すモニターの前に、福島第一原子力発電所を模した立方体が4つ並んでいる。リボンが結ばれ、まるでプレゼントのようにみえるそれは、都市の電力が原子力発電所からの贈り物であることを示すと同時に、原子力発電所を通じてなされる地元への贈り物、すなわち地元自治体への交付金を始めとする、中央からの様々な経済的な還元が行われていたことを示す。その贈り物のリボンは、3.11まで解かれていなかった。3.11以後、パンドラの箱のように開け放たれた原子力発電所の廃墟の跡から、その贈り物の意味、すなわち近代化を果たした日本列島における中央と地方の政治的な関係が示されることとなった。これからしばらく私たちの社会は受け取ってしまった贈り物の意味を考え続けることになるだろう。

3——フクシマとヒロシマ

長期的な避難を余儀なくされた福島第一原子力発電所周辺の住民8万人のための都市を構想した藤村龍至の《雲の都市》は、毎年3月11日に8万人が一度に集まり、故郷に向けて黙祷を捧げることができる鎮魂のための広場「丑寅の森」を備える。ここでは、フクシマから鬼門/裏鬼門の方角へ取られた軸線を延長し、沖縄へ同様の都市を建設する構想へと拡大している。フクシマ(原発)、埼玉(郊外化)、沖縄(基地)など、戦後の日本が近代化の過程で生み出した様々な歪みを象徴化する軸線である。

呻くように立ち尽くすミイラのような人々やドクロの海で祈る聖母のような女性が描かれた阿部合成の《声なき人々の群れ》や《埋められた人々》は、言葉を残さぬままに亡くなった人々の鎮魂歌のようにみえる。これらの作品に、国家に対する無言の抗議と、敗戦後の彼のシベリア抑留体験を重ねてみることは難くない。ここでは、これらの作品を震災と原子力発電所の事故の犠牲となった無名の人々の怒りや悲しみ、救済への願いを表すものとして召還する。

出雲、若狭、熊野、平城京、平安京、伊勢、富士、鹿島といった象徴的な場所が軸線によって関係付けられることを示した磯崎新の《しまじまの黄昏》は、フクシマを既存の構造に結びつけることで、神話の一部に取り込もうとする。原爆の被災地が、磯崎の師であり世界的な建築家である丹下健三が引いた原爆ドームと平和公園をつなぐ1本の線によって「平和都市・広島」として象徴化されたように、フクシマを象徴化しようとする。

原爆の廃墟や核爆弾によるジェノサイドをモチーフとした今井俊満の〈ヒロシマ〉シリーズは、バーナーで焼け焦がしたキャンバスに絵の具の塊を激しく流動させ、核爆発による物質の溶融の瞬間やその後、降り注いだ黒い雨を描写している。それは「廃墟としての未来」を打ち出して来た磯崎の作品と重ね合わせることで、未来を強く予告する。

4——危険社会

3.11以後の放射能汚染や食品添加物などに代表される今日の「危険」は、化学や物理学の記号によってしか表示されず、ガイガーカウンターなどの特殊な機械がないと認識できない。つまり、現代社会においては、科学が「危険」として提示したものを国民が受け入れるか否かが問題になる。言い換えるなら、そこには、科学者が大衆に知識を提供し、その合理性を理解させ「啓蒙」するという構図が存在する。

タール漬けになった鳥の彫刻や奇形化した鳥の写真からなるマーク・ダイオンの作品は、科学によって自然を支配し、社会の富を増加させることが、今日の汚染を誘発していることを提示する。ハンバーガーやフライドポテトの化石は、近代化された社会における食の過剰な生産とその飽和の問題を提起する。そして同時に、体系的な知識や高度な測定機器によって生み出された、一見、客観的で普遍的にみえる科学の正しさが、絶対的なものではなく、相対的な正しさでしかないことをユーモラスに示そうとする。

5——アーキテクトの戦後史

1945年以後の日本の各時代における建築家のイメージを描いたmashcomix+TEAM ROUNDABOUTの《戦後建築史マンガ》は、戦後史を大阪万博の行われた1970年、阪神・淡路大震災、オウム事件、インターネット元年を迎えた1995年、東日本大震災の起こった2011年によって4つに区分する。建築と政治が緊張関係を保っていた頃(1945-70年)の未来を予測する科学者として描かれていた建築家は、国土全体の近代化と都市の拡大のプロセス(1970-1995)で、建築家像は外部空間で団体戦を行う組織型の設計者と、内部空間で1対1への関係でセッションするアトリエ型の作家へと引き裂かれる。その後のグローバル化と情報化のプロセス(1995-2011)は、まったりと生きる女子高生とオタクたちの均質な世界をアメリカ発のシステムが見下ろす、メタシステム型の建築家像を浮かび上がらせた。そして、震災を経て、コミュニティに介入してボトムアップによってヴィジョンを描いていく「7人の侍」のような建築家像(2011)が浮かび上がりつつあるなかで、危険社会と現代のアニマ(霊)という今日的なテーマで社会を俯瞰する青森の視点が《戦後建築史マンガ》の集大成として描かれた。

6——ウェブに描かれた野生

画像検索のアルゴリズムを逆手にとってインターネット上にある画像を格子状に表示するチームラボの《グラフィティ@グーグル》は、画像を意図的に配列し、グーグルの検索結果をキャンバスにみたて1枚の絵を描いた作品である。彼らは、今日の公共空間をかたちづくるグーグルを使って絵を描くことを、公共空間を違法に占拠して匿名的に制作されるグラフィティになぞらえてみせる。

ここではさらに工藤甲人や野澤如洋、高橋竹年ら伝統的な日本画家の鴉図とチームラボの映像作品を並べることで、ウェブ画面のスクロール(scroll)を伝統的な日本画の巻物(scroll)にみたて、水墨画の早描きとコンピュータの操作感覚をつなげてみせる。

神話において空から世界を俯瞰し人間を導く賢者の役割を与えられてきた鴉がウェブを舞う姿は、ウェブを通して世界をハックし、未来をリードするチームラボの群像ともいえるだろう。

7——自然

巨大な石を男性器にみたて、母なる大地に直立させるストーンサークルと呼ばれる古代の遺跡を撮影した森万里子の写真は、生殖の比喩であり、豊穣の祈りでもある。それらが円環を描くさまには、死を新たな生の始まりと捉え、死を生と連続するものと考えていたといわれる古代の死生観が表されている。森は、遺跡だけでなく、自らつくったストーンサークルをも撮影している。それは、古代の自然の大いなる循環の一部として生きる思想を現代に呼び出すものだといえる。

1997年に作家が白神山地を8日間にわたり歩行し制作したリチャード・ロングの〈白神山地歩行〉シリーズは、「白神で自分の存在は地を這う小さな虫のようなはかないものだった」と語ったことで知られている。あらゆる人為の影響を免れた世界最大のブナの原生林の中に、きわめてひそやかに残された円環は、人間もまたも大いなる自然の一部として生滅し、循環する存在であることを暗示する。

偏光パール系の絵の具で描かれた大庭大介の《FOREST》は、光の角度によってその色彩が構造色のように変化する。近づいて細部を観ると抽象画のようにみえるのに対して、遠くから全体を眺めると、鬱蒼と繁る樹海のイメージが現れる。鑑賞者の観る位置や天候、照明にあわせて移ろう掴みどころのない無人の森のイメージは、計り知れない自然の実体を仄めかす。

この作品は、樹々そのものを描くのではなく、樹々の間に漂う気配や光を描き森を表現することで、近代的なリアリズムのように明暗法などで自然の変化を否定し支配するのではなく、他律的な自然や環境の移ろいそのものと共生することの隠喩となっている。

8——神話

人間や島や国家が、街や少女や樹木などに翻訳される石井七歩の作品では、例えば、島国の大地は少女に喩えられ、街を支える大地を、母なる大地という表現が示すような安定したものではなく、少女のように不安定で未成熟なものと捉える。《理想惑星》では、平行世界をテーマに、現在のありえたかもしれない世界の別の可能態を4つの惑星に翻訳する。これらの表現は、ありえない世界を想像することによって私たちの社会の基盤に潜む曖昧さや危うさを批評する。

中村宏の《観光独裁》もまた巨大な少女の身体をまるでひとつの国家のように描いたものだ。本作は、新幹線が開通してまもない1965年の日本の状況を鋼鉄の少女に喩えていると解釈できる。

荒川修作の《作品》は木製の棺桶に紫の布を敷き、そこに巨大なセメントの塊を納めた作品である。固いセメントの表面には、荒川が手で掴み、蹴り、体ごとぶつかった痕跡が刻印され、さまざまな異物がはめこまれている。棺に横たわる、その形容しがたい形の塊は、社会のうちに潜む不安感や、人間の死に対する根源的な恐れを具現化したもののようにもみえる。

高山良策の超現実的な絵画もまた、人間の中にある論理的には語ることができない衝動を映し出している。これらは、非科学的なものを排斥した近代が隠蔽しようとした魔術的なものや理性の通じない不条理な世界観を表現することで、戦後日本の社会的な矛盾や危機、近代化されてもなお失われなかった呪術性を鋭く抉りだしている。

9——ファルス

水蒸気爆発した原子炉をジオラマで再現した伊藤隆介の《そんなことは無かった》は、CCDカメラでライブ上映するインスタレーションである。お菓子の箱の中に水蒸気爆発した原子炉がある光景は、3.11以後、日常生活に遍在することになった見えない放射能汚染の状況やその怖れを具体化している。直接はみえないものを恐怖するしかない3.11以後の状況は、まるで荒ぶる神への畏怖に重なる。原子炉の形が男性器のかたちをしていることを踏まえて読み替えるなら、本作は、3.11で溶融した原子炉とその虚実の入り交じった実体を描くことで、不能になったファルス、すなわち男性優位の社会構造の破綻と、それに対する人々の怖れを示している。

ピンクのキューブでできたスプツニ子!の《チンボーグ》は、機械のペニスである。それは単なるオブジェではなく、装着者の心拍数に応じて上下する。つまり、この作品では男女の性差を交換することが試みられている。着脱可能な機械の男性器は、現代の性転換技術の問題をユーモラスに提示すると同時に、男性中心主義的な思考を転倒させ、ファルスの意味を不能にする。これはチューリップや芋虫などのかたちをした醜いファルスを鳥かごや水槽に入れて培養する様を表現することで男性優位の社会構造の歪みを客観化し、批判しようとする工藤哲巳の作品群と対になるだろう。

さらに縄文時代の土器の破片を床に点在させ、大地にたつ石をファルスとみたてていた古代のストーンサークルのように現代の作品を並べることで、古代と現代を繋げ、ファルスの意味を転倒させ、新たな原理を探るものとして各作品を位置づける。

10——再生

チェルノブイリなどで土壌の除染効果が実証されている「菜の花」を用いて放射能汚染の問題を考える「菜の花プロジェクト」に触れたことから制作が開始されたスプツニ子!の《菜の花ヒール》は、靴デザイナー、串野真也氏とのコラボレーションによるもので、歩くとハイヒールの先端部分からナタネが地中に埋め込まれ、その足跡から「菜の花」を咲かせる仕組みになっている。

福島県南相馬市の仮設住宅の交流サロンで被災者と意見交換やアイディアの相談を行い、滋賀県で開催された「菜の花学会」に参加するなど、ネットばかりではなくリアルな空間でもコミュニケーションを重ね、生み出されていく本作は、コミュニティに介入してボトムアップによってヴィジョンを描いていく今日的なアーキテクトのイメージにも重なり、不能になったファルスに代わる、新しい社会構造や創造の原理の種子を撒くものである。

HYPER ARCHIPELAGO
Light of Silence

超群島
HYPER ARCHIPELAGO
ライト・オブ・サイレンス
Light of Silence

磯崎新
Arata Isozaki
キュルルfeat.チハルチロル
cururu featuring chiharu-chiroru
大庭大介
Daisuke Ohba
ダレン・アーモンド
Darren Almond
阿部合成
Gosei Abe
中村宏
Hiroshi Nakamura
小島一郎
Ichiro Kojima
工藤甲人
Kojin Kudo
森万里子
Mariko Mori
マーク・ダイオン
Mark Dion
石井七歩
Naho Ishii
リチャード・ロング
Richard Long
高山良策
Ryosaku Takayama
伊藤隆介
Ryusuke Ito
棟方志功
Shiko Munakata
荒川修作
Shusaku Arakawa
スプツニ子!
SPUTNIKO!
チームラボ
TEAM LAB
工藤哲巳
Tetsumi Kudo
今井俊満
Toshimitsu Imai
mashcomix＋TEAM ROUNDABOUT
mashcomix + TEAM ROUNDABOUT
藤村龍至
Ryuji Fujimura

動線設計:青木淳
Circulation Recommendations: Jun Aoki
[関連企画]トヨダヒトシ(三内丸山遺跡)
Related exhibition: Hitoshi Toyoda

キュレーション:飯田高誉/藤村龍至
アソシエイトキュレーション:高橋洋介
動線設計:青木淳
会場構成:藤村龍至建築設計事務所(藤村龍至/沼野井諭)
協力:青森県教育庁文化財保護課

青森 EARTH 2012

青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART
〒038-0021 青森市安田字近野 185
tel. 017-783-3000 | fax. 017-783-5244
www.aomori-museum.jp | bijutsukan@pref.aomori.lg.jp

地下1階

1 静謐な光

Darren Almond
ダレン・アーモンド

1971年ランカシャー(イギリス)生まれ。1993年ウィンチェスター美術学校卒業。2005年ターナー賞ノミネート。主な展覧会に「センセーション」(1997年 英国王立芸術院)、「ヴェネチアビエンナーレ」(2003年 イタリア)、「テート・トリエンナーレ「オルターモダン」」(2009年 テート・ブリテン ロンドン)など

1 Fullmoon@Takahama｜2008｜180 x 180 cm｜C-print faced mounted onto acrylic
2 Fullmoon@Nabae Coast｜2008｜180 x 180 cm｜C-print faced mounted onto acrylic
3 Fullmoon@Uwase｜2008｜180 x 180 cm｜C-print faced mounted onto acrylic
4 Fullmoon@Obase｜2008｜121.2 x 121.2 cm｜C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame
5 Fullmoon@Mihama｜2008｜121.2 x 121.2 cm｜C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame
6 Civil Dawn@Mt. Hiei.10｜2008｜1/5+2AP｜121.2 x 121.2 cm｜C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame
7 Civil Dawn@Mt. Hiei.9｜2008｜121.2 x 121.2 cm｜C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame
8 Fullmoon@Obase Bay｜2008｜121.2 x 121.2 cm｜C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame
9 Fullmoon@Miyako｜2006｜121.2 x 121.2 cm｜C-print mounted onto aluminium with aluminium white frame

2 近代化と地方

小島一郎｜Ichiro Kojima

1924年青森県生まれ(1964年没)。1944年に現役兵として徴兵され、第47師団に所属。敗戦後、帰国し、戦災で焦土と化した故郷の青森に衝撃を受ける。復員後、しばらくは代用教員などを行いながら、戦後の混乱期を過ごし、徐々に家業の写真機店を手伝うようになる。1954年「北陽会」に参加し、本格的な活動を開始。同年に東奥美術展特選。1955年国際写真サロン入選。1961年に上京、同年カメラ芸術新人賞を受賞。死後、10年以上写真界から忘れ去られていたが、1980年代半ば頃から再評価の機運が高まり、2004年に初の本格的な写真集「hysteric Eleven 小島一郎」(ヒステリックグラマー)が刊行。2009年にも青森県立美術館で大回顧展「北を撮る小島一郎」が開催

10 題不詳(五所川原市十三付近)｜1958年｜24.2 x 16.5 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
11 題不詳(下北地方)｜1958-62年｜24.7 x 17.7 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
12 題不詳(津軽地方)｜1960年｜24.1 x 16.6 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
13 題不詳(五所川原市十三付近)｜1960年頃｜24.4 x 15.9 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
14 題不詳(津軽地方)｜1957-58年｜30.5 x 18.8 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
15 段畑の雪模様｜1959年｜19.6 x 29.8 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
16 題不詳(弘前市)｜1960年｜16.4 x 24.2 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
17 題不詳(つがる市木造)｜1958-61年｜24.7 x 16.8 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント
18 題不詳(弘前市桜庭一東目屋方面)｜1958-61年｜16.5 x 24.3 cm｜ゼラチン・シルバー・プリント

キュルル feat. チハルチロル
cururu feat. Chiharuchiroru

2006年結成のアートユニット。キュレーター、アーティスト、デザイナー等から構成される。キュルルは「個」としての人格を持たず、「個」としての主張も持たない、ゆえに個人名の存在しない、複数の人間がかかわるアートユニット。アート、文化、社会といった現代の諸相をどこまでも記号化して提示することで、賛美、肯定、批判など様々な評価と解釈が生じる作品を手がけている(ただし、いわゆる「現代美術」だけは批判可能としている)

19 ひかりのありか｜2011-2012年｜サイズ可変｜映像、木、アクリル等

3 フクシマとヒロシマ

藤村龍至｜Ryuji Fujimura

1976年東京生まれ。2008年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学。2005年藤村龍至建築設計事務所主宰。2010年より東洋大学専任講師。2007年よりフリーペーパー「ROUND-ABOUT JOURNAL」企画・制作・発行。2010年よりウェブマガジン「ART and ARCHITECTURE REVIEW」企画・制作。主な建築作品に「BUILDING K」(2008)「東京郊外の家」(2009)「倉庫の家」(2011)「小屋の家」(2011)。主な編著書に「1995年以後」(2009)「ARCHITECT 2.0」(2011)「3.11後の建築と社会デザイン」(2011)。主なキュレーションに「超都市からの建築家たち」(2010)「CITY2.0」(2010)

20 雲の都市 2012｜2012年｜120.0 x 120.0 cm｜石膏、パネル

阿部合成｜Gosei Abe

1910年青森県生まれ(1972年没)。旧制青森中学で太宰治と同級生であり、以来友人になる。1934年京都絵画専門学校日本画科を卒業。1938年「見送る人々」が二科展に初入選するも、アルゼンチン駐在大使の糾弾によって反戦絵画の焼印を押される。1943年に招集を受け満州を転戦。敗戦後、シベリアで2年間抑留生活を送り1947年に帰国。1960年にメキシコ国立近代美術館で個展を開催

21 声なき人々の群れ(A)｜1966年｜92.2 x 56.1 cm｜合板・油彩
22 声なき人々の群れ(B)｜1966年｜114.3 x 76.5 cm｜合板・油彩
23 埋められた人々(A)｜1966年｜113.2 x 69.7 cm｜合板・油彩

磯崎新｜Arata Isozaki

建築家。1931年生まれ。磯崎新アトリエ代表

24 しまじまの黄昏｜2011年｜DVD(7分)

今井俊満｜Toshimitsu Imai

1928年京都府生まれ(2002年没)。旧制武蔵高校卒業後、1950年東京藝術大学油絵科に派遣学生として1年間通学。1952年に渡仏し、ソルボンヌ大学文学部に在籍。同時期にサム・フランシスやミシェル・タピエと知り合い、アンフォルメル運動に参加し、この運動の主要作家のひとりとなる。1970年代後半よりフランスの哲学者フェリックス・ガタリと交友。「カオスモス」論などガタリに思想的な影響を受ける。1980年代から花鳥風月などを題材に日本の伝統美を意識させる作風へと展開。1995年「ヒロシマ」シリーズを着手。1997年フランス文化勲章コマンドール受章

25 ヒロシマ｜1997年｜90.9 x 116.7 cm｜キャンバス・ミクストメディア
26 ヒロシマ｜1997年｜90.9 x 116.7 cm｜キャンバス・ミクストメディア
27 ヒロシマ｜1997年｜116.7 x 90.9 cm｜キャンバス・ミクストメディア
28 ヒロシマ｜1997年｜90.9 x 116.7 cm｜キャンバス・ミクストメディア
29 ヒロシマ｜1997年｜90.9 x 116.7 cm｜キャンバス・ミクストメディア
30 ヒロシマ｜1997年｜200 x 300 cm｜キャンバス・油彩
31 黒い雨｜1997年｜130.3 x 194.0 cm｜キャンバス・油彩
32 ヒロシマ｜1997年｜130.3 x 194.0 cm｜キャンバス・油彩

4 危険社会

Mark Dion｜マーク・ダイオン

1961年マサチューセッツ州(アメリカ)生まれ。1986年ハートフォード大学スクール・オブ・アート卒業。2003年、同大学名誉博士号。考古学や科学的な手法を転用した展示によって科学の「合理性」への疑問を提示するインスタレーションで知られ、ニューヨーク近代美術館やテートギャラリー(ロンドン)で展覧会が開催されるなど世界的に高い評価を得ている。主な受賞にラリー・オルドリッチ財団賞(2001年)など

33 4 fake fossils｜2003｜hamburger: h.2.5 x w.18.5 x d.17 cm / sausage: h.4 x w.18.5 x d.19 cm / french fries: h.2 x w.19 x d.19 cm / hot dog: h.4.5 x w.19 x d.7 cm｜Ceramic
●三内丸山遺跡出土土器と併せて展示
34 1 Tray of Tar and White fragments｜2003｜h.6.3 x w.88 x d.29.1 cm｜Mixed media (FRP、石膏、タール)
35 タール漬けの鳥｜2003｜h.42 x w.82 x d.28 cm / h.26 x w.54 x d.18 cm / h.36 x w.44 x d.23 cm / h.56 x w.69 x d.28 cm｜FRP, tar
36 6 Bird｜2000｜50 x 31.3 cm (image size)｜X-ray photograph｜6点セット

5 アーキテクトの戦後史

mashcomix+
TEAM ROUNDABOUT

1999年結成。漫画家、イラストレーター、デザイナーなどで構成される創作漫画集団。現在までに8冊の同名漫画雑誌を発行。また、一軒の家屋をすべて使った「HOUSE」展、池尻中学校での「RANDSEL」展などの展示活動から、雑誌「TOKION」「建築雑誌」での連載「N.Y. TOKYO BAR」の内装アートワークなど、多岐にわたり活動中。協力:松島潤平

37 戦後建築史マンガ 1945-1970｜2009年｜110 x 210 cm｜マンガ、テキスト
38 戦後建築史マンガ 1970-1995｜2009年｜110 x 210 cm｜マンガ、テキスト
39 戦後建築史マンガ 1995-2010｜2009年｜110 x 210 cm｜マンガ、テキスト
40 戦後建築史マンガ 2011-｜2011年｜110 x 210 cm｜マンガ、テキスト
41 戦後建築史マンガ 2012(AOMORI)｜2012年｜110 x 210 cm｜マンガ、テキスト

棟方志功｜Shiko Munakata

1903年青森県生まれ(1975年没)。1921年ゴッホの原色図版を見て感動し画家を志し、松木満史などと青光画社を結成する。その後、画家としての修行のために上京。1928年に帝展に初入選。同年、平塚運一と出会い版画の道に進む決心をする。柳宗悦、河井寛次郎らの知遇を得て精力的に制作する。ルガノ国際版画ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレなど国際展において評価され、1956年ヴェネチア・ビエンナーレにおいて国際版画大賞を受賞する。1970年文化勲章受章

42 鷲栖図｜1971年｜275 x 803 cm｜紙・着彩
43 祢無多運行連々絵巻(複製)｜印刷物
44 御鷹々々図｜1960年｜173.0 x 716.0 cm｜紙・着彩
45 酸湯大岳鷹揚図｜1955年代｜55.5 x 69.5 cm｜紙・着彩
46 八甲田山壽加由仙境図｜1957年頃｜56.0 x 69.0 cm｜紙・着彩
47 父母愛恩之板画鏡｜1948年｜各47.0 x 36.0 cm｜紙・木版
48 道祖土頌 濡々の柵｜1950年｜67.0 x 31.8 cm｜紙・木版
49 道祖土頌 馬頭の柵｜1950年｜67.0 x 31.5 cm｜紙・木版
50 柳緑花紅頌｜1955年｜各46.5 x 46.7 cm｜紙・木版
51 鶯暖の柵｜1960年｜135.5 x 255.0 cm｜紙・木版

地下2階

6 ウェブに描かれた野生

team Lab

プログラマ・エンジニア、数学者、建築家、Webデザイナー、グラフィックデザイナー、CGアニメーター、絵師、編集者など、情報化社会のさまざまなものづくりのスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団

52 グラフィティ@グーグル 東京群殖図(Horizontal)｜2012年｜ウェブ

工藤甲人｜Kojin Kudo

1915年青森県生まれ(2011年没)。川端画学校にて日本画を学ぶ。日本画の新しい脱皮を目指し、地方主義を唱えた福田豊四郎の期待を受け、創造美術、新制作展協会、創画会を中心に活躍。1971年青森県褒賞受賞。1986年東京藝術大学名誉教授。1989年勲四等旭日小綬章受章

53 野殖｜1954-55年頃｜69.2 x 55.9 cm｜紙本着色、金箔地
56 明・暗｜1960年｜130.3 x 162.1 cm｜紙本着色

高橋竹年｜Chikunen Takahashi

54 雪景花(カラス)図｜制作年不明｜108.2×39.8 cm｜絹本墨画淡彩

野沢知洋｜Zyoyo Nozawa

55 柿とカラスの図｜制作年不明｜135.7 x 33.3 cm｜紙本着色
57 枯木双鳥図｜制作年不明｜163.7 x 29.3 cm｜紙本着色
58 鳥之図(カラスと柿)｜制作年不明｜140.2 x 35.0 cm｜紙本着色

7 自然

森万里子｜Mariko Mori

1967年東京都生まれ。1993年ホイットニー美術館、インディペンデント・スタディ・プログラム(ニューヨーク)修了。主な個展:1998年「Mariko Mori」(シカゴ現代美術館、シカゴ)、1999年「Mariko Mori : Dream Temple」(プラダ財団、ミラノ)、2000年「Link」(ポンピドゥセンター、パリなど。主な受賞歴に1997年第47回ベニスビエンナーレ優秀賞(受賞作「Nirvana」)、2001年第8回日本現代藝術奨励賞など

59 Kudaka island Site Installation II (Site installation and photographed by artist)｜2004｜111.4 x 128 cm (image size)｜Piezzo Dye print
60 Kudaka island Site Installation III (Site installation and photographed by artist)｜2004｜128 x 111.4 cm (image size)｜Piezzo Dye print
61 Kudaka island Site Installation I (Site installation and photographed by artist)｜2004｜111.4 x 128 cm (image size)｜Piezzo Dye print
62 Callanish｜2005｜101.6 x 127.0 cm (image size) Gelatin silver print
63 Stone Circle, Komakino｜2004｜55.0 x 68.0 cm (image size)｜Piezzo Dye print
64 Stone Circle, Nishizakiyama｜2004｜55.0 x 68.0 cm (image size)｜Piezzo Dye print
65 Stone CIrcle, Oshuro｜2004｜55.0 x 68.0 cm (image size)｜Piezzo Dye print

Richard Long｜リチャード・ロング

1945年ブリストル(イギリス)生まれ。1968年ロンドンのセント・マーティン美術学校卒業。自然の中を「歩行」しながら残した痕跡を、写真、地図、テキストなどで記録した作品で注目を集め、1976年にヴェネチア・ビエンナーレのイギリス館代表に選ばれる。1989年ターナー賞受賞。1990年フランス文化勲章シュバリエ受章。2009年高松宮殿下記念世界文化賞(彫刻部門)受賞。1960年代末を代表する芸術運動アースワークの中心的な作家のひとりとして知られ、現在も郷里のブリストルを拠点に活動を続けている

66 ある青い森の歩行｜1997年｜81.4 x 111.8 cm｜写真、テキスト
67 白神の線｜1997年｜81.4 x 111.8 cm｜写真、テキスト
68 白神の円環｜1997年｜81.4 x 111.8 cm｜写真、テキスト
69 初夏の円環｜1997年｜81.4 x 111.8 cm｜写真、テキスト
70 キャンプ地の石｜1997年｜81.4 x 111.8 cm｜写真、テキスト

大庭大介｜Daisuke Ohba

1981年静岡県生まれ。京都造形芸術大学卒業後、東京藝術大学大学院修了。主な個展に「The Light Field ー光の場ー」(2009年、SCAI THE BATHHOUSE, magical ARTROOM)など。主なグループ展に「時の遊園地」(2010年、名古屋ボストン美術館)など

71 FOREST#2｜2009｜180 x 220 cm｜acrylic on cotton
72 FOREST#3｜2009｜180 x 220 cm｜acrylic on cotton

8 神話

高山良策｜Ryosaku Takayama

1917年山梨県生まれ(1982年没)。1938年に招集、軍隊生活の中でスケッチを描く。1944年、東宝航空教育資料製作所に入社し、難波田龍起や山下菊二と知り合い、1946年に前衛美術会の結成に参加。以後、同展や「日本アンデパンダン展」を中心に活躍した。1951年に東宝教育映画を退社後は、学研、東宝、大映、円谷プロ、電通などで舞台美術、特撮ミニチュア、アニメ人形の製作なども行った。ウルトラシリーズで、成田亨の怪獣のデザインを立体化した人物としても知られる

73 照葉樹林｜1981年｜112.0 x 162.0 cm｜油彩
74 ほんとうに見たいなら・・・｜1976年｜194.0 x 130.3 cm｜油彩・キャンバス
75 題不詳｜1964年｜131.5 x 91.5 cm｜石膏・パネル
76 題不詳｜1970年｜52.5 x 64.5 cm｜油彩・キャンバス
77 風夜｜1963年｜145.5 x 91 cm｜石膏・パネル
78 題不詳｜1964年｜115.5 x 90 cm｜油彩、石膏・パネル
79 題不詳｜1965年｜107.0 x 91.0 cm｜石膏・パネル

石井七歩｜Naho Ishii

1991年東京都生まれ。主なグループ展にHidariZingaro史上最多入場者数を達成した「エノテロリスム」(2011年、HidariZingaro、東京)、「堂島リバービエンナーレ2011 "Ecosophia"」(2012年、堂島リバーフォーラム、大阪)など

80 私は海を抱きしめていたい｜2012年｜210 x 297 mm｜ink on paper｜8点セット
81 理想島[森林]｜2011年｜297 x 420 mm｜pen on photograph
82 理想島[河川]｜2011年｜297 x 420 mm｜pen on photograph
83 理想島[海原]｜2011年｜297 x 420 mm｜pen on photograph
84 理想島[大気]｜2011年｜297 x 420 mm｜pen on photograph
85 理想島[岩石]｜2011年｜297 x 420 mm｜pen on photograph
86 理想宮[境界のある国、海のむこう、壁]｜2011年｜210 x 297 mm｜pen on paper
87 理想宮[宗教のある国、平和、秩序、強制]｜2011年｜210 x 297 mm｜pen on paper
88 理想宮[子供の夢を想像する、大人の国]｜2011年｜210 x 297 mm｜pen on paper
89 理想宮[分断された国]｜2012年｜210 x 297 mm｜pen on paper
90 理想宮[たんぼ畑のある国、こどものはしゃぎ声、こわい塔]｜2012年｜210 x 297 mm｜pen on paper
91 あの日、世界は分岐した｜2012年｜1167 x 910 mm｜acrylic, pigment on canvas｜4点セット

中村宏｜Hiroshi Nakamura

1932年静岡県生まれ。1955年日本大学芸術学部美術学科卒業。1953年に美学協を結成し青年美術家連合に参加。「日本アンデパンダン展」、「自由美術展」などで活躍。1954年、前衛美術会に入会。1957年に「不審の自己批判」を執筆し、評論家の中原佑介と論争になるが、以後独自の切り口による絵画論を多数執筆し「論としての絵画」を追求していく。1969年、現代思潮社美学校の設立に参加し、油彩画工房を担当。政治的・社会的事件を取材して描かれたその作品群は日本の戦後美術史において高い評価を得ている

92 観光独裁｜1965年｜130.3 x 162.1 cm｜キャンバス・油彩
93 場所の兆(2)｜1961年｜91.5 x 117.0 cm｜油彩・キャンバス
94 テロル｜1959年｜90.5 x 72.5 cm｜油彩・ボート

荒川修作｜Shusaku Arakawa

1936年愛知県生まれ(2010年没)。「読売アンデパンダン展」や「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」で活躍後、1961年に渡米。人生の伴侶であり共同制作者となる詩人マドリン・ギンズと出会う。映画、版画、著作など多彩なジャンルで国内外を問わず積極的な活動を展開。1995年に岐阜県のテーマパーク「養老天命反転地」を手がけ、翌年「第28回日本芸術大賞」を受賞。1986年フランス文化勲章シュバリエ受章。2003年紫綬褒章受章

95 作品｜1960年｜133.0 x 97.0 x 23.0 cm｜セメントオブジェ、その他

9 ファルス

工藤哲巳｜Tetsumi Kudo

1935年大阪府生まれ(1990年没)。1958年東京藝術大学卒業。1962年「第2回国際青年美術家展」大賞受賞。同年に渡仏しパリを拠点にヨーロッパで活動。1977年サンパウロビエンナーレ特別賞受賞。1982年天皇制シリーズの制作を開始。2009年ミネアポリスのウォーカーアートセンターにて回顧展が開催。その作品は海外で高く評価されニューヨーク近代美術館やポンピドゥーセンターなどに所蔵

96 あなたの肖像｜1970-74｜48.0 x 23.0 x 37.0 cm｜ミクストメディア
97 未来と過去とのエンドレステープの間での瞑想｜1979年｜32.5 x 38.0 x 22.0 cm｜ミクストメディア
98 電子回路の中における放射能による養殖｜1970年｜直径48.0 x 高25.0 cm｜ミクストメディア
99 遺伝染色体の雨の中で啓示を待つ｜1979年｜31.0 x 33.0 x 21.0 cm｜ミクストメディア(プラスティック・紐等)
100 自然による養殖―それを見ている人々｜1970-71年｜直径26 x 高30 cm｜ミクストメディア
101 縄文の精子の生き残り｜1986年｜51.0 x 40.0 cm｜ミクストメディア(紐、針金等)
102 環境汚染―養殖― 新しいエコロジー｜1971年｜51.0 x 80.0 x 26.0 cm｜ミクストメディア

伊藤隆介｜Ryusuke Ito

1963年北海道生まれ。1988年、東京造形大学デザイン学科卒業。1992年、シカゴ美術館付属大学大学院研究科修士課程修了。現在、北海道教育大学(芸術課程)教授。映像作家として活躍する一方、「村雨ケンジ」名義で、コミック、アニメ評論を多数執筆

103 そんなことは無かった｜2012年｜CCDカメラ、ビデオプロジェクタ、モーター、照明器具、ミクストメディア

● 三内丸山遺跡出土土器
縄文時代前期―中期

スプツニ子!｜Sputniko!

プロフィールNo.10参照

104 チンボーグ｜2009年｜20 x 30 x 70 cm｜アクリル、アルディーノ基盤、皮ベルト、心拍数計測器、モーター

10 再生

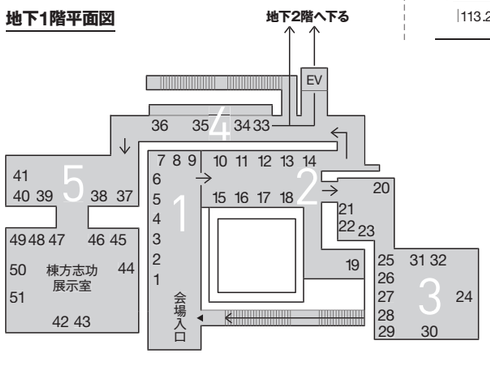
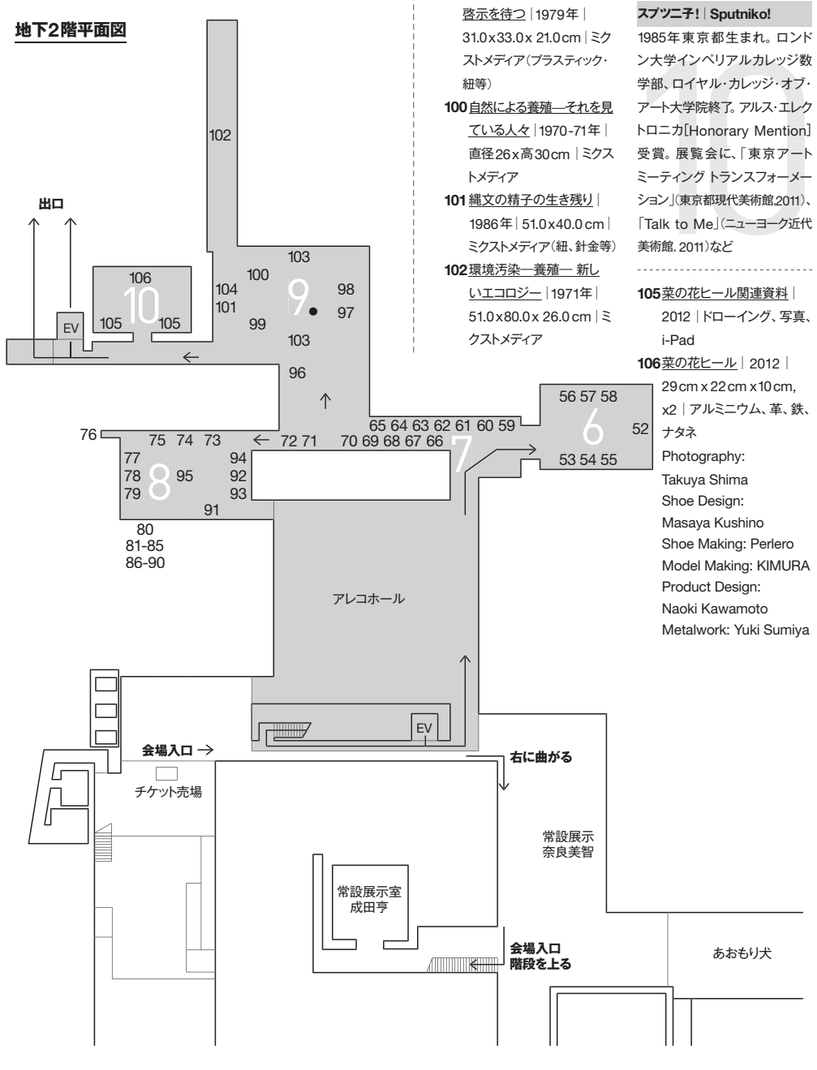
スプツニ子!｜Sputniko!

1985年東京都生まれ。ロンドン大学インペリアルカレッジ数学部、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート大学院終了。アルス・エレクトロニカ[Honorary Mention]受賞。展覧会に、「東京アートミーティング トランスフォーメーション」(東京都現代美術館,2011)、「Talk to Me」(ニューヨーク近代美術館, 2011)など

105 菜の花ヒール関連資料｜2012｜ドローイング、写真、i-Pad
106 菜の花ヒール｜2012｜29 cm x 22 cm x 10 cm, x2｜アルミニウム、革、鉄、ナタネ

Photography: Takuya Shima
Shoe Design: Masaya Kushino
Shoe Making: Perlero
Model Making: KIMURA
Product Design: Naoki Kawamoto
Metalwork: Yuki Sumiya

地下1階平面図



地下2階平面図